

科学はヒトの感覚と感性の本質に迫れるか？

演題・講師：^{Fig. 210.}

“「多感覚」「Sensory re-adjustment」の指標としてのベクシオン”

妹尾 武治 先生（九州大学高等研究院）

“絵を描く心の基盤を探る”

齋藤 亜矢 先生（中部学院大学子ども学部）

日時：2014年10月14日（火）16：30～18：30

場所：新潟大学五十嵐キャンパス総合教育研究棟 B 棟 5 階

プレゼンルーム

主催：人文社会・教育科学系「間主観的感性論研究推進センター」

共催：人文学部「ヒト認知系の総合的研究」プロジェクト

概要：

実験心理学、比較認知科学がご専門の、気鋭の若手研究者2名をお招きして、私たち人間の感覚や感性の本質や起源について、実証的な研究の成果からお話頂きます。

妹尾先生には、私たちの様々な感覚（いわゆる五感）が互いに緊密に連携しながらも、各々の役割や関係性をダイナミックかつ柔軟に変化させながら環境への適応を図る様子を、ベクシオンと呼ばれる錯覚を利用した様々な実験の成果とともにお話頂きます。

また、齋藤先生には、チンパンジーとヒトの子どもを対象とした研究の成果から、「絵を描く」という行為の進化的、発達の起源について、また芸術と科学の関係について「比較認知科学」あるいは「芸術認知科学」の視点から話題を提供して頂きます。

聴講に際して事前登録などは一切不要です。皆様お誘い合わせの上、ご参加下さい。

講演要旨：

”「多感覚」「Sensory re-adjustment」の指標としてのベクシオン” 妹尾 武治 先生 (九州大学高等研究院)

我々の五感は日々様々なバランスで供応して知覚を決定している。自己移動感覚はまさに、その最たる例である。クラブのように薄暗く騒音が激しい環境では、視覚、聴覚の重みづけは一時的に低下し、体性感覚の重みを大きくし、自己移動感を最終的に決定していると考えられる。渋谷のスクランブル交差点では、騒音が大きいいため、聴覚よりも、視覚が研ぎすまされ（重みづけが大きくなっ）ているはずである。このように、普段無意識のうちに、我々の五感の重みづけは刻々と変化し続けている。このことを、証拠を持って皆さんに提示したい。証拠として扱うのが、ベクシオン（視覚誘導性自己移動感覚）の強さの変化である。ベクシオンは、重りを身につけている時、室内の酸素が少なく、気圧が低い時、アルコールを摂取した時、視覚剥奪に順応した時、などなどにおいて、その強度を大きく変化させる。これらについて、実験の詳細を提示しながら、説明を行って行く。

”絵を描く心の基盤を探る” 齋藤 亜矢 先生 (中部学院大学こども学部)

発達過程で子どもがはじめて描くのは、たどたどしい「なぐりがき」だ。ペンを持つ手を動かすと紙の上に軌跡が現れる。そうして身体的な探索をおこないながら「なぐりがき」は徐々にコントロールされ、あるとき具体的な物の形（表象）が生み出されるようになる。一方、進化の過程でヒトがはじめて描いた時期、理由はさだかではないが、現存する最古の洞窟壁画には、すでに動物などの表象が生き生きと描かれている。時代をさらにさかのぼり、約600万年前にヒトと共通の祖先を持つチンパンジーも画材を与えれば筆記具をあつかって描くことができる。描線を細かくコントロールし、その筆致には個性も現れるが、かれらが表象を描いた例はない。ヒトはなぜ描くことをはじめたのか。表象を描くことの認知的な基盤とはなにか。ヒト幼児とチンパンジーを対象とした比較認知科学的な研究を足がかりに、描くことの起源について考察する。